

「コロナ禍における不登校支援に向けて」

1 アンケート調査実施概要

(1) 調査の趣旨

本県の不登校児童生徒数は、この5年で小学校は2.5倍、中学校は1.5倍と増加傾向にある。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響のもとでの学校における不登校支援の在り方について、これまでと違う視点から検討を行うことが求められている。今まで誰も経験したことのない、長期にわたる学校の臨時休業が、児童生徒にどのような影響を与えたのかということについて検証するため、協力校の児童生徒・保護者を対象にアンケートを実施した。コロナ禍での学校の一斉休業や再開後の状況を整理することにより、コロナ禍における不登校支援の方向性について検討するとともに、そこで得られた知見を今後の不登校児童生徒に対する学校支援に生かすことが本調査の目的である。

(2) 調査実施期間 令和2年11月

(3) 調査対象

① 児童生徒アンケート

校種	学校数	学年	回答数	備考
小学校	7	5年生	552	昨年30日以上欠席者+今年度5日以上の欠席者(29人中回答ありは24人)
中学校	8	1年生	1,327	昨年30日以上欠席者+今年度5日以上の欠席者(101人中回答ありは64人)
		2年生	1,364	昨年30日以上欠席者+今年度5日以上の欠席者(140人中回答ありは81人)
計	15	3学年	3,243	

② 保護者アンケート

校種	学校数	学年	回答数	備考
小学校	7	5年生	170	各学年1クラスのみ
中学校	8	1・2年生	479	
計	15	3学年	649	

③ 学校アンケート

24校(小学校:10校、中学校:14校)

(4) 調査の内容(児童生徒・保護者共通)

① 児童生徒・保護者

大項目	小項目(児童生徒)	小項目(保護者)
3～6月の学校が臨時休業だったときについて	19項目	21項目
6月の学校再開後について	12項目	10項目
現在について	10項目	10項目

② 学校

臨時休業中の取組、不登校児童生徒への支援、実施上の課題等を記述により回答

2 アンケート分析の視点

ア 欠席日数の違いによる児童生徒の回答状況

- ・令和2年度（10月末時点）と元年度において、欠席日数が4日以下の児童生徒の回答状況
- ・令和2年度に新たに不登校傾向（欠席日数5日以上）となっている児童生徒の回答状況
- ・令和元年度に欠席日数30日以上の子童生徒で、令和2年度も引き続き不登校傾向（欠席日数5日以上）の子童生徒と4日以下に減っている子童生徒の回答状況

イ 学校の不登校支援の取組と実施上の課題

ウ 子童生徒と保護者の回答状況の比較

3 調査結果と分析

(1) コロナ禍における現状と課題

① 家庭生活に関連する状況

※【 】内は別冊「学校生活アンケート欠席日数別集計結果」参照

※文中の「現在」は令和2年11月時点とする

長期の臨時休業から、学校再開に向け、欠席日数の多い子童生徒ほど、規則正しい就寝・起床、ゲームの長時間利用等、生活習慣の切り替えがうまくいっていない。

- ・「規則正しい就寝・起床をしている」という質問について、臨時休業中と現在を比較すると、欠席日数の多さに関わらず肯定的な回答（あてはまる・どちらかといえばあてはまる）の割合が増加している。しかし、現在の状況では、起床については、4日以下92.2%、20日以上71.9%、就寝については、4日以下78.8%、20日以上68.8%となっている。 【1P：1-A-1~4】
- ・「ゲームを3時間以上している」という質問では、臨時休業中「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が、4日以下62.1%、20日以上71.4%となり、いずれも6割以上となっているが、現在の状況では、4日以下が39.6%であるのに対し、20日以上は、62.5%となり、依然として6割を超えている。 【2P：1-A-5・6】

② 友だちの関わりに関連する状況

学校が再開し、友だちと会えることをうれしく思う一方で、欠席日数の多い子童生徒ほど、人への関わりに対する意識は高くない。

- ・学校再開時、「友だちと会えることがうれしかった」という質問では、肯定的な回答が4日以下92.9%、5~19日87.9%、20日以上68.8%となり、欠席日数が多い子童生徒も6割を超えているものの、その割合は低くなっている。 【3P：1-B-2】
- ・「1人で過ごす時間」に関する質問では、「臨時休業中、1人で過ごす時間が長かったことが残念だった」「学校再開時、1人の時間が減ることがうれしかった」について、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した子童生徒の割合は、欠席日数が多いほど減少するのに対し、「まったくあてはまらない」と回答した子童生徒は、逆に多くなっており、欠席日数の多い子童生徒ほど人との関わりへの意識が低くなっていることが分かる。 【4P：1-B-5・6】

③ 学習に関連する状況

すべての児童生徒において、友だちとの関係以上に、学習への不安を感じており、欠席日数の多い児童生徒はその傾向が強い。

- ・学校再開に向け、「友だち関係が不安だった」という質問に、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した児童生徒の割合は、欠席日数4日以下40.0%、5～19日39.0%、20日以上28.2%であるのに対し、「勉強が不安だった」の質問では、4日以下62.7%、5～19日70.2%、20日以上53.2%と高くなっている。

【3P：1-B-3】【6P：1-C-4】

- ・学校再開時、「宿題ができていない」ことへの不安は、4日以下26.1%、5～19日38.5%、20日以上34.4%となり、欠席日数が多い児童生徒が高くなっている。

【5P：1-C-3】

④ 登校に関連する状況

欠席日数の少ない児童生徒ほど、学校に行くことをうれしい・楽しいと感じており、欠席日数の多い児童生徒は、完全登校に比べ、分散登校（少人数・短時間）に良さを感じている傾向にある。

- ・「現在、学校が楽しい」という質問に、肯定的な回答をした欠席日数4日以下の児童生徒の割合は85.7%であるのに対して、欠席日数5～19日75.0%、20日以上43.8%と欠席日数が増えるにつれ、低くなっている。

【7P：1-D-2】

- ・学校再開時、「分散登校がうれしかった」という質問に対して、4日以下70.5%、5～19日70.0%、20日以上68.8%と、欠席日数の多い児童生徒も良さを感じているが、「完全登校がうれしかった」という質問の肯定的な回答では、20日以上は46.9%に下がっている。

【7P：1-D-3・4】

⑤ 学校の取組に対する状況

児童生徒は、臨時休業中のオンラインの活用について良さを感じているが、多くの学校で、実施できる環境にまで至っていない。また、欠席日数の多い児童生徒ほど学習用アプリやオンラインでの勉強等、学習への活用には、良さを感じていない可能性がある。

- ・臨時休業中に「電話やメールで様子を聞く」「手紙を配布する」等により、児童生徒の様子を確認する取組が多くの学校で行われており、「うれしかった」と肯定的に回答する児童生徒が欠席日数の多少にかかわらず、5割以上みられる。【13P：F-1・2】

- ・メッセージ動画の作成やオンラインを活用して、様子を伝えたり、勉強を行ったりすることへの取組は、少ない状況にある。

【13P：F4・6・7】

- ・「インターネットなどで学習用アプリが使えたこと」「オンラインで勉強したこと」の学習に関するインターネットの活用についての質問に対して、「うれしかった」と肯定的に回答した児童生徒の割合は、学習用アプリの活用が4日以下45.8%、20日以上30.8%、オンラインでの勉強が4日以下34.6%、20日以上12.5%となり、欠席日数が多い児童生徒ほど、低い状況にある。

【13P：F-5・7】

⑥ 学年間の状況

中学校 1 年生は、新しい学校生活をスタートする時期が長期の臨時休業となり、入学関係行事・学級開きの指導、学校・学年行事等、コロナによる影響のため変則的な対応となった。友だち関係や学習への不安では、他学年と比べて高い傾向にある。

- ・「学校再開時、友だち関係が不安だった」「現在、友だち関係が気になる」という質問で、「よくあてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答した児童生徒は、小学校 5 年生が 38%・34%、中学校 2 年生が 29%・26%であるのに対して、中学校 1 年生は 48%・34%と高くなっている。【12P：小 5・中 1・中 2-4・6】
- ・「学校再開時、勉強が不安だった」「現在、勉強が気になる」という質問で、「よくあてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答した児童生徒は、小学校 5 年生が 54%・40%、中学校 2 年生が 61%・60%であるのに対して、中学校 1 年生は 67%・65%と高くなっている。【12P：小 5・中 1・中 2-4・6】

⑦ 保護者の状況

児童生徒と同様に学習への不安を感じている。また、オンラインの活用には、まだ理解が進んでいない。
ゲームの使用時間や児童生徒の不安への意識等に、認識の差が見られる。

- ・臨時休業中に学校が取り組んだ「電話やメールで様子を聞いてくれたこと」「手紙の配布」「家庭訪問の実施」には、児童生徒以上に良さを感じている。一方で、オンライン活用については、児童生徒ほどには良さを感じられていない。【14P：ア-1～3】【14P：ア-6・7】
- ・「臨時休業中、学校で勉強できないことで、学習の遅れが心配だった」の質問に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した保護者は 88.2%となっている。【16P：イ-C-1】
- ・「現在、ゲームを 3 時間以上している」の質問に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した児童生徒は欠席日数 4 日以下 39.6%、5 日以上 47.1%あるのに対し、保護者は 26.8%となるなど、生活習慣や友だち関係、勉強への不安なことについて、認識の差が見られる。【15P：イ-A-6、イ-B-3】【16P：イ-C-3】

(2) 今後の不登校支援の取組に向けた検討

魅力ある学校づくりに向けた取組の更なる推進

- ・昨年度欠席日数 30 日以上の児童生徒のうち、今年度欠席日数が 4 日以下となっている児童生徒の 88.9%が、「現在、学校が楽しい」について肯定的に回答している一方、今年度も 5 日以上欠席している児童生徒は、40.0%にとどまっている。 【7P：3-D-2】
- ・昨年度、欠席日数 30 日以上の児童生徒のうち、今年度欠席に日数が 4 日以下となっている児童生徒の 77.8%が「分散登校がうれしかった」に肯定的な回答をしている。 【7P：3-D-3】

【検討すべき事項】

- ◆校長のリーダーシップのもと、チーム学校として「学校が楽しい」と思える魅力ある学校に向けた取組の工夫
- ◆分散登校の状況で設定された、少人数・短時間での学習等への指導・支援の場を平常時に活かす工夫
- ◆スクールカウンセラー（以下、SC）等、専門家を活用した児童生徒理解の効果的な方法

学習支援（全体指導と個別支援）の工夫

- ・欠席日数に関わらず、勉強に不安を感じたり、気にしていたりする児童生徒の割合は 5 割を超えている。特に、不登校傾向にある欠席日数 5～19 日の児童生徒は「学校再開時、勉強が不安だった」「現在、勉強が気になる」の質問に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した児童生徒の割合は、それぞれ 70.2%、61.5%と高くなっている。 【6P：1-C-4・5】

【検討すべき事項】

- ◆全ての児童生徒を対象にわかりやすい授業を行うための継続した工夫とともに、個に応じた支援の工夫（個の学習定着の把握と状況に応じた支援）
- ◆不登校児童生徒を対象とした県立施設、教育支援センター（適応指導教室）、民間施設との連携による学習支援の工夫
- ◆学習アプリやオンライン等、ICT の学びへの活用方法

個に応じた居場所づくり、絆づくりの工夫

- ・欠席日数の多い児童生徒ほど、臨時休業中に友だちに会えない残念さ、学校が再開して友だちに会えるうれしさが、欠席日数の少ない児童生徒に比べ、低い状況がみられる。また、1人で過ごす時間が長いことへの抵抗感も、欠席日数が多い児童生徒ほど低い状況にあり、昨年度欠席日数が 30 日以上の児童生徒は、1人で過ごすことをあまり気にしていない傾向が高いことがわかった。 【3P：3-B-1～6】

【検討すべき事項】

- ◆学校における短時間登校や別室指導等、個に応じた支援を充実させ、学校や友だちとのつながりを継続させる工夫
- ◆多様な体験活動等に関する支援プログラムの充実した県立施設や教育支援センター（適応指導教室）、民間施設等の個の状況に応じた活用と学校との連携の工夫
- ◆学校における人的配置の状況等、個別支援の限界を踏まえ、SC やスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）、他の外部人材等を活用して、関係機関・施設につなぐ効果的な方法
- ◆「不登校児童生徒への支援の在り方について」（令和元年10月：文科省通知）を踏まえた対応

保護者との連携と理解啓発

- ・子どもの状況に対して、学校と保護者との間に認識の違いがみられる場合がある。学校が本人・保護者と十分に話し合うことにより、信頼関係が築かれている場合には、登校につながるケースが多い。
- ・保護者は子どもが登校できなくなったことに対して過度に不安を感じる場合がある。一方、登校しないことに対して、登校の必要性をあまり感じていない、子どもにまかせている等により、学校と共通理解が図れない場合がある。
- ・学校は保護者の思いを受け止め、組織的に対応していく必要がある。一方で、人的配置や環境整備の状況から、対応ができない場合もある。

【検討すべき事項】

- ◆個に応じた短期計画・長期計画についての保護者との共通理解の方法
- ◆保護者と連携した不登校支援を行うため、個に応じた居場所づくりについて、SC・SSW や他の外部人材等を活用して、周知や理解を得る効果的な方法
- ◆児童生徒の状況を把握し、別室登校等学校ができることとできないことを明確にしたうえで、県立施設や教育支援センター（適応指導教室）、民間施設等、多様な居場所があることへの理解啓発と周知の方法

オンラインによる相談や学習支援、学習用アプリの活用等、ICT の効果的な活用の研究

- ・GIGA スクール構想により、1人1台端末が整備されつつある。今年度の臨時休業期間においては、活用している学校はまだ少なかったが、今後は、不登校支援においても、活用を検討していく必要がある。
- ・臨時休業中に活用した学校において、メッセージ動画や教員と話したり、友だちの様子を伝えたりしたことについては、欠席日数による児童生徒の感じ方に大きな差は見られないが、学習用アプリの活用やオンラインによる勉強では、欠席日数の多い児童生徒ほど良さを感じていない傾向にある。 【13P：F-5・7】

【検討すべき事項】

- ◆教育委員会や学校において、オンラインを活用した不登校支援の実践の蓄積
- ◆県立施設、教育支援センター（適応指導教室）、民間施設におけるオンラインを活用した学習支援の効果的な方法を検討

〔今後検討すべき具体的な取組例〕

学校等における取組・連携の例		専門家等	教育委員会	関係施設等	保護者
<p>取組において、主体的に取り組む関係者・関係機関等 ◎（ないところは学校が主体） 取組において、連携して取り組む関係者・関係機関等 ○</p> <p> 専門家等・・・SC、SSW等の専門家や外部人材による取組・活用 教育委員会・・・教育委員会による取組・連携 関係施設等・・・県立施設（但馬やまびこの郷、神出学園、山の学校）、教育支援センター（適応指導教室）、民間施設（フリースクール等）等、関係施設による取組・連携 保護者・・・保護者による取組・連携 </p>					
魅力ある学校づくりの更なる推進	・ケース会議等で、SC・SSWが参加した児童生徒のアセスメント	○	○	○	
	・多様な別室支援の検討（短時間、教室とのオンライン等の工夫）	○	○		○
	・児童会、生徒会主導で友だちの良いところを発信し合う取組	○			
	・SCによる児童生徒に向けたリラクセス法やアンガーマネジメント、アサーショントレーニング等の講話やエクササイズの実施	◎			
	・不登校の児童生徒も参加しやすい行事の工夫				○
学習支援（全体指導と個別支援）の工夫	・すべての児童生徒にとって、わかりやすい授業に向けた研修		○		
	・欠席が長期化する前（断続的な欠席状況）の学習支援の強化	○	○	○	
	・どんなサポートを望んでいるか、学習支援に関する不登校生へのアンケートの実施			○	○
	・オンライン学習教材を共有し、学校内外から不登校生をサポートできるネットワークの構築		○	○	○
	・教育支援センター（適応指導教室）によるオンラインの学習支援	○		○	

	学校等における取組・連携の例	専門家等	教育委員会	関係施設等	保護者
個に応じた居場所づくり、絆づくりの工夫	・SC、SSW、学生ボランティア、地域ボランティア等多様な人材の確保		◎		
	・教職員や保護者への「不登校児童生徒への支援の在り方」（令和元年10月文科省通知）の理解を深める研修や情報発信等の実施		◎	○	○
	・担任以外の教職員も不登校児童生徒と繋がるための校内体制の構築	○	○	○	
	・児童生徒、保護者、教職員に対する兵庫特有の県立施設（やまびこの郷、神出学園、山の学校）活用につなげる情報発信		◎	◎	○
	・教育支援センター（適応指導教室）と連携した放課後登校	○	○	○	○
	・初任者等への不登校対策に関する研修の充実（施設視察等を含む）	○	◎	○	
	・別室で行うスモールステップの仕組づくり（短時間等の設定、友だちとの交流の場の設定等の工夫）	○			○
	・学校と教育支援センター（適応指導教室）が情報共有できるアセスメントカードの作成		○	○	
	・学生ボランティア、地域ボランティア等を活用した別室対応	○	○		○
保護者との連携と理解啓発	・学校や市町教育委員会で対応可能な支援の整理と保護者・児童生徒への説明（SC等の専門家を交えた説明、児童生徒による主体的な選択等）	○	○	○	○
	・各学校のホームページにSCやSSWなどからの定期的なメッセージ発信	◎			○
	・教育支援センター（適応指導教室）等による保護者交流プログラムの実施			◎	○
ICTの効果的な活用の研究	・個に応じた関係づくり等、学習支援への準備段階としてのオンラインの実施（様子の確認や日常会話等、つながることへの取組）		○	○	○
	・オンライン学習教材を共有し、学校内外から不登校生をサポートできるネットワークの構築		○	○	○
	・不安が大きい児童生徒に対する音声のみの通信等の工夫	○			○
	・教育支援センター（適応指導教室）等によるオンラインの学習支援や個別相談		○	◎	○